

明治時代の英語教科書

大熊 榮

日本における英語教育は明治維新以前から始まっていて、『諳厄利亞興学小笈』*(1811)や『諳厄利亞語林大成』*(1813)などの辞書が編集された(*印は本学図書館所蔵)。文法は「文典」と呼ばれる教科書によって学ばれたが、蕃書調所から1860年ごろに『英吉利文典』が出版されたほか、輸入された『クワッケンボス文典』や『ピネオ文典』が前述の蕃書調所(のちの開成所)や慶應義塾などで使われていた。読本として広く使われていたのは『ウィルソン』*Willson** 『サンデル氏ユニオン』*Sanders' Union Reader** 『スウィントン』*Swinton** など、編者の名を冠して呼ばれる教科書シリーズである。1860年代に英語学習者が急増したことは、当時ポケット辞書として人気を博した『英和对譯袖珍辞書』(1862)の編纂者堀達之助の英文による序文に記されている。1866年には開成所から『英語階梯』『英語訓蒙』が出版された。和綴りで“English Spelling Book”という英文表題もついている『英語階梯』*はA B C



「諳厄利亞語林大成」



「諳厄利亞興学小笈」

から始めて、単語の発音を学び、簡単な文を読む国産の英語入門書で、資料的価値は大きい。

維新直後、天下国家を担うエリート教育として英語教育が重視され、開成所に16歳以上20歳以下の士族の子弟を全国から集め、中濱万次郎や外国人教師を招いて教育の任に当たさせた。そこで使われた教科書は『クワッケンボス文典』や『ウィルソン』であった。教授方法に正則と変則があったことも知られている。発音に留意するのが正則であり、変則はもっぱら意味の斟酌に重点を置く。福沢諭吉の慶應義塾は変則を大幅に採用したため、その卒業生は英語が話せなかったとされる。

1872年の「学制頒布」は日本がエリート教育から国民教育へと舵を切り換える第一歩であり、その内容は全国を大学区、中学区、小学区に分け、それぞれに次の表のような数の学校を設置するというものであった。

	区あたりの数	全国合計
大学区 (大学校)	8	$8 \times 1 = 8$
中学区 (中学校)	32	$8 \times 32 = 256$
小学区 (小学校)	210	$8 \times 32 \times 210 = 53760$

これだけの数の学校を一気に創設することになって生じた大問題は財政負担と教員の確保である。政府は「学制頒布」と同時に「東京師範学校」を創設、その後全国に作られる「小学校」教員養成のための「師範学校」教員育成を開始した。さらに3年後の1875年には「東京師範学校」の中に「中学師範学科」が設置され、中学校教員養成に着手した。中学校はかつての「藩校」のように主として英語の教科書によって「専門学」を修めることとされた。そのような学校の教員養成が目的なので、「東京師範学校」での教育はM. M. スコットのようアメリカ人やアメリカの師範学校

Training School へ留学した伊澤修二、高嶺秀夫のような日本人エリートがその任に当たった。「中学師範学科」は英語で授業が行われる唯一の学校であるとともに、学費が全額支給されたので、私立英語学校などからの応募者が殺到したとされる。

1879年に政府は「学制」を廃止し、アメリカ人モルレーの草案により地方分権主義的な「教育令」を制定するが、中央集権志向の強い日本の実状に合わず、国民教育の停滞を招く。この停滞を救ったのが時の文部大臣森有礼による1886年の「学校令公布」である。これによって帝国大学、師範学校（尋常、高等）、中学校（尋常、高等）、小学校（尋常、高等）の制度が全国画一的に整備された。「東京師範学校」は「東京高等師範学校」となり、尋常師範学校を卒業して初等教員を経験したものを受け入れ、中等教員を輩出することとなった。その後1899年の「学校令」改正で「尋常中学校」は「中学校」、「高等中学校」は「高等学校大学予科」となった。また「高等女学校」の制度を整え、遅ればせながら女子教育の改善がなされている。

制度改革に伴う英語教員需要の増大と英語学習

熱に応えるべく、「東京高等師範学校」は1894年に「英語専修科」を設置し、官設で唯一の英語教員養成機関となり、週27時間のうち17時間を英語に充てるカリキュラムを組んだ。この「専修科」は「英語学部」（1898）を経て1912年には「英語専攻科」となるが、その卒業生には1899年に始まった教員検定制により無条件で英語教員免許が与えられた。

明治時代の国民教育は制度の制定と教員の養成に手間取り、とりわけ英語教科書については外国出版の「文典」「読本」などで間に合わせるしかなかった。本学図書館所蔵教科書にはその種の教科書として貴重なものが豊富にある。*Easy Lessons** by S. R. Scofield(1864)や Epes Sargent による *The Standard Speller** (1870), *The Standard Reader** (1872)あるいは *The New American Reader** (1871)などはアメリカ人向け英語入門教科書だが、明らかに日本人向け教科書のモデルになったと思われる。

文部省編輯局が森有礼の意見を容れ、ウォルター・デニングの編纂による *English Readers** を出版したのは1887年、維新からおおよそ20年後の



「ウィルソン」



「スウィントン」



「サンデル氏ユニオン」



「スウィントン」



「英語階梯」



「English Readers」

ことである。「The High School Series」という副題からして当時の「高等学校」学生向け読本で、6巻から成っていた。内容はさながら英語による修身教科書である。「この読本シリーズの目的は日本人学生が多少なりとも馴染んでいる考えを英語で表現することにある」とデニングは「序文」に書き、主に日本や中国の故事を自ら英語で書いて、数多くの短いエッセイをこのシリーズに集めた。

デニングの読本に先立ち、*A Grammar of the English Language for Japanese Students** という文典小冊子が W. D. コックスによって書かれ、日本橋の「Z. P. Maruya」から1880年に出版されている。その「序文」で著者は日本人が英文法をどう見ているかに触れている。「この国では、英文法は西洋の科学と文学が詰まった倉庫の扉を開ける鍵という価値しか持たない。そのことは容易に見て取れると思う。この点で英文法は国語における読み書きと同類と見なされている。つまり真の知識としてでなく、知識を手に入れる手段として見なされているのである」そのような文法観に応えるべく、「言語構造の基礎となる主要原理」として語を8品詞に分類して解説し、練習問題を与えている。このほかにも1889年には東京帝国大学外国人教師ジェームズ・ディクソンによる *English Composition** が「Hakubunsha Series

of English Textbooks」として出版される。ここには品詞論のほかに統語論が加えられ、さらに“Current Bad English”として21の英作文例とその添削が添えられている。内容は相当に高度で、「序文」に「教員向け」とあることからすると、日本人英語教師のための英作文指導用教科書であったと考えられる。1901年になると三省堂から *Cathcart's Literary Reader** 2巻が出版される。これは19世紀英米の作家たちが書いた文章のアンソロジーであり、英語教員志望者たちが教室で読んだものと考えられる。

これらの「舶来」の読本、文典、英作文教科書から国産英語教科書へと進化していくわけだが、同時にまたそうした教科書で学んだ英語教師たちが生徒にどのように英語を教えたかも容易に想像がつく。日本の英語教育史にとって貴重なこれらの教科書が改めて研究されることは、英語学習熱が高まりをみせる今日においてこそ、いっそうの意義を持つように思われる。同種のブームは明治時代にもあったからである。

(この稿を書くに当たり櫻井役の名著『日本英語教育史稿』(1936, 復刻1970)に負うところ大であった。記して感謝したい。)

(おおくま・さかえ 現代語・現代文化学系教授)